
現実逃避して何が悪い！

蕎麦湯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実逃避して何が悪い！

【コード】

N9899Q

【作者名】

蕎麦湯

【あらすじ】

努力をしても報われないなら、報われる努力をすればいいじゃない！ とばかりにゲームに逃避することを決めた俺。コツコツ地味な作業とか苦にならないので、ゲーム世界の片隅で、ひっそり生きていこうと思います。ただ、なんだか現実とゲーム世界での知り合いやら友人やらが楽しそうにしているのを見ると、ついふらふらと付き合ってしまった……。巻き込まれ？ いいえ自業自得です。そして独りでOTZ。そんな俺の生活風景。

プロローグ：ログイン前

ああ、いやだいやだ。

何がいやだつて、勝てない勝負に挑まなければならぬことだ。

道場の隅で壁に向かって立ちつくしながら、ため息をつく。

板張りの床に、同じく板張りの壁。格子状の天井。どれもこれもが古ぼけて、染みだらけだった。毎日の雑巾がけのおかげか、手入れの行き届いた室内は清潔で、二百年近く古い建物ながらも十分使用に耐えられる。

この道場を建てたのは、名家とは言わないし由緒正しいなどと言ったこともないが、それなりに古い血筋だそうで、その子孫である現所有者は、本家だの分家だのといった存在がまかり通っている世界で当主なるものをやっていた。

そんな家が伝えてきた「戦うためならなんでも使え、卑怯とは賞め言葉です」的な超実践主義で技を教えている流派があったりする。

どんな運命の悪戯か、俺はそこで内弟子なんぞをやっている。

ま、そこは名ばかりなだけ。

本家に居候していて、道場で武術も習っているから、その道場のお弟子さん方に俺は内弟子と認定されているというだけだ。

で、超マイナーだけど、門下生の皆さんは超本気で日々鍛錬に明け暮れている。内弟子が俺一人だけなもんだから、そんな特別な立場に対する嫉妬もそれなりにあるわけ。

いじめとは言わないまでも、たまに鬱屈した感情が俺にぶつつけられることになる。

「ほら、早く練習試合しましょうよ。ウド先輩」

ウド、というのは、俺のあだ名が【独活の大木】だから。身長が一八七センチもあって、道場でも一番の弱者であることから名付けられていた。

誰か天野くん呼んできてくれ。ボケ倒すから。

あだ名で呼ぶ後輩に、腹を立てる余裕もない。ああもう逃げたい。逃げ出したいなあ、くそう。

俺は心底嫌々、開始位置に立つ。相手までの距離は2メートル。一足で蹴りの間合いに入れる距離だ。

試合形式なので、急所攻撃無し、肘膝頭突き無し、一本先取の審判判定ルール。

俺は高校三年生。相手は小学五年生。身長差は三十センチ以上。それなのに、俺の方が弱い現実がここにはあった。総当たり戦とか日々の組み手で、大体の格付けは終わっている。ちなみに俺は中学生以上の門下生の中で最底辺となっている。そんなんだから、負けの見える勝負にやる気が起きるはずもない。

審判に名乗り出た師範代は、

「妙なことをしたら、きつちり責任取らせるから安心なさい」

と、あまり頼りにならないことを仰った。

だって、ねえ。

組み手で寸止め失敗して顔面に拳めり込んで鼻血が止まらなくなっても「ワリ」「おう」で済んでしまう世界なのだ。妙なことをされたとき、一体俺は骨を何本諦めなければならぬというのか。

「構え！」

腹の底から出ている師範代の声に、俺は思わず反射的に構えてしまふ。ああもう条件反射だよ。上の命令に逆らえない、体育会系ナイズされた俺の習性が憎い。

目の前の小学生は、顔に余裕満面の笑みを浮かべながら、土居心念流槍一突の型。右足右拳を引き左手を真つ直ぐ前に伸ばし、半身に構えて、突きの一撃で勝負を決めるように見せる構えだ。門下生曰く、これで突きが決まったらカツコイイよね的構え。

実は突き出した左手に意識を向けさせ、あるいは攻撃させ、隙をつきカウンターを入れることを目的とした構え。だから突きの構えはあくまでもポーズなのだが、見た目が突き重視な感じだから、道場生は必ず槍一突による突き技で一本取るというロマンを追う。

土居心念流は、実践主義と伝統主義が混在している。流派として伝える技は技として教えるけど、他流派の技術ガンガン吸収して鍛えたえれば、いいところ取りでより強くなれるよね！ という考え方なのだ。

そんなわけで、俺は最も慣れた空手のサンチンの型を選ぶ。かかとを開いてしっかりと床を踏み締め、脇を締めて構えた両腕を、ゆつくりと顔の前へと持ち上げる。

カハあ~~~~~

息を長く吐き、

スツ

短く吸う。

丹田に力が籠もり、全身に力が満ちるような感覚が広がっていく。「はじめえっ！」

師範代の合図があつた瞬間に、小学生が一足飛びに間合いを詰めてきた。

あ、くそ。いくらなんでも舐めすぎだろコイツ。

迎撃してくれるわ！

あつさりと同合いに入ってきた小柄な体へ向かつて、右拳に渾身の力を籠めて突く。

体重の乗った突きは、まともに当たれば有効打でなかつと相手に深いダメージを与える威力を誇る。

まともに当たれば。

ぶん、と重い風切り音の先に、打撃の当たる音はなかった。

くつ、避けられた！

正拳の外側から回り込むようにして、小学生はステップイン。彼は才能があり、基礎練習もしっかり打ち込んでいるため、歩法にも安定感がある。槍一突の型を崩さずここまで接近できるとは、さすが有望株と呼ばれているだけのことはある。

とにかく動かないと、このままでは一撃もらってしまう。間違はなく有効打。このままじゃ秒殺だ。いくら実力差が明白とはいえ、

すんなり負けてやるものか。

間合いを開けるか牽制するか防ぐか。

とにかく足を動かせ！

脳から命令を出す。

……………くっ。

動かないといけないのに、俺の体は動いてくれない。

頭じゃわかつてるんだって！ ほら、対戦相手の動きだつて見えてもいるし！

わかつているんだ。見えているんだ。なのに、足の裏には根が生えてしまったかのように床に張り付いてしまっている。両腕は鉛を縛り付けられたかのように重く、動かし難くなっていた。

少年が四肢に力を入れたのを感じた。足を捻り込み、上半身を反転させ、右腕をゆっくり伸ばし、拳を俺に近づけてくる。

引き延ばされたかのような時間の中で、俺は抗うことをやめた。

代わりに、すぐにやってくるであろう痛みに対して覚悟を決めた。

「セイヤアアアアアア！」

気合いと共に放たれた拳は、俺の下腹に吸い込まれていった。

うげっほおおえ。

そしてあっさり負けました。

……………ちよっとリバーズしたのは、早く忘れることにしよう。

人々が肉体から自我を解き放てるようになってから、早四十年が過ぎていた。

アメリカのとある神経解剖学者が認知症治療に繋がる脳機能に関

する画期的な発見をしたり、ドイツでとある医療器メーカーが脳波をコントロールする革新的な発明をしたり、日本のとある電機メーカーが頭に装着するリングタイプのハンズフリーキーボードを発売したもののあまりに難解な操作性に売り場から姿を消したり

文化や歴史と同じように、小さく積み重ねた科学力は、ついにプログラムで再現された五感を脳に直接伝えることで、現実そのままの実体験を得ることを可能とした。

例えるなら、身体は自宅で横になっているのに当人は海で泳いでいる実感を得ることも可能ということである。

それは、昔からSF小説などで空想されていた、現実と誤認するほどリアルな仮想現実、いわゆるバーチャルリアリティと呼ばれるもの。

現在では、VRインターフェイスが新しい家電三種の神器と目されている、というくらいに一般家庭に浸透していた。

VRネット全盛の時代でも、平面モニターで閲覧できるインターネットコンテンツは廃れることがなかった。端的に言えば、気が休まらないからだ。自室で座り慣れた椅子に座り、ジュース片手にモニターを眺めることに比べ、VR環境に対応した情報というのは、あまりに生々しすぎる。わざわざVRネット内に構築したマイルームで、再現したモニターを見ながら仮想ジュースを飲んでネットサーフィンをする人物も珍しくないのである。

それほどまでに、VR空間は現実に近いかった。

だからこそ、VRネットでは新しいサービスが瞬く間に広がっていった。

それは、現実では叶えられないシチュエーションが体感できるからだ。

例えばスポーツコンテンツ。酸素ポンペを用意せず、生身で南国の綺麗な海を何時間も潜っていける。二メートル級の山頂から、スノーボード一枚で滑り降りられた。

体感ドラマ、というジャンルも増えた。自分がドラマの登場人物

そのものになれるため、これ以上ない臨場感が味わえる。

娯楽以外でも、VRコンテンツは利用されていた。例えば学校。身体にどれだけ不自由があろうとも、VR学校では、健常者と同じ学校生活を送ることができた。

そしてそれは、VRゲームでも同じことが言える。

稽古も終わり。

夕食もすっかり食べて、風呂にも入ってまったりしている午後八時。

俺は居候先にあてがわれた自室で、座椅子に座りながらマウス片手にモニターを見ながらネットサーフィン中だった。

VRでもネットサーフィンはできるが、五感を再現できるだけのデータ量が必要なわけで、回線使用料が一般のネット回線よりも割高なのだ。具体的には従量制。使ったら使った分だけお金がかかるのである。常時接続できる金満は滅ばいいのに。

今、俺が見ているサイトは、とある新作VRゲームの公式ホームページだ。

ゲームジャンルはMMORPG。一つのフィールドに大人数が集まり、戦闘や交流ができるのだ。

情報が露出した頃から注目をしており、日々新たに発表されるゲームシステム情報やスクリーンショットを見ては、一日でも早くプレイできる日を待ち望んでいた。

しかし、もうすぐ我慢の日々も終わる。

オープン テストが開始されるのだ。

公式サイトも、テスト開始を盛り上げるためにリニューアルオープンされており、俺は、新たに出て来たゲームの紹介ページを眺めていた。

新型AI搭載！

この世界のNPCは生きている！

現実そのままの社会がここにはある！

選べるプレイヤーキャラ種族は三種類！

そして、種族は複数の人種で構成されており、その数は十以上！戦う、育てる、造る。あなたが望む生き方に合う種族が選べる！

レベル、熟練度に限なし！

鍛えた分だけ、あなたの力は上がり続ける！

最強も、万能も、努力次第で思いのまま！

【称号】 【名声】 システムで、あなたの行動は全て自分に反映される！

あなたの行いによって、街の人々の反応は、好意にも悪意にも変化する！

行動の結果によって得られる【称号】は、様々なステータス効果を及ぼす！

生産スキルは作るだけではない！ 描くことも可能！

武器や防具に限らず、作れる道具はすべてあなたのデザインを反映させることが可能！

世界でたった一つの、あなたオリジナルアイテムを作れ！

デザイン創作スキルは、正式サービス開始時に課金アイテムと

して販売予定です

などなど。

新作VRMMORPGタイトル【ロスト】の公式サイトでは、風景の画像やイメージデザイン画を背景に、煽り文句がいくつも並んでいた。

レベルと熟練度上限なし、というのが、ゲームバランス崩壊しそつで不安になってくるのだが……うーん。ゲーム制作に関わっている知人、通称『教授』からこの話を聞いたとき、散々やめておいた方がいいと念押ししておいたんだけどなあ。それでも決めたというのなら、勝算があつてそういうシステムにしたのだろうから、期待しておこう。もしミスしたら『教授』を罵倒しまくってやろう。

俺は脳内予定表にそつ書き込んで、続けてストーリーのページをクリック。

『ストーリー』

過去の伝承は伝える。

世界の中心とされた国があり、大陸があつたという。

現代に至るまでそんな大陸が発見された例など一度としてなく、現代では空想の産物、もしくは海に沈んだのだと空想されるだけであつた。

しかし、大陸が海に沈んだとされていた海域に、ある日突如として陸地が現れた。

偶然にも大陸を発見し、外縁を探索した船乗り達もたらした報告には、樹木が生い茂り、とても海に沈んでいたとは思えない自然の姿があつたという。

地上には建造物の跡地と思われる痕跡が数多く残り、現在も形を残す建物の中には、宝石や金細工などの財宝、作成方法すらわから

ない美しい芸術品の数々、未知の技術で作られた道具や武具の数々が残っていた。

新大陸で待つていたのは財宝だけではない。

人類の天敵として余りある力を持つ、凶悪な魔獣の数々も、大陸には生息していた。

だが、人々はこぞって新大陸を目指していく。

財宝を得て一攫千金を。

未知の技術を解明して、世界に名を残す発見を。

魔獣を屠り、英雄としての名声栄誉を。

あらゆる危険をその身で乗り越えることを決意して、新大陸に人は集う。

新大陸が伝説に残る名も無き大陸なのだとして、あの土地にはどのような過去があるのだろうか？

その過去が、自らの栄光に繋がると信じて。

あなたは、新大陸へ向かうため、ガレオン船に乗り込んだ。

ま、よくある話だな。

しかし、楽しみではある。

俺は顔がにやけるのを自覚した。

このゲームには、俺の考案したアイデアが入っているのだ。

例えば世界設定。あるいは神様の名前。他には新大陸に眠る遺産アイテムの能力などなど、細かな部分にいくつも俺の決定が反映されている。

理由は簡単。開発メンバーの中心人物と知り合いだからだ。

想像するのが楽しくて、世界設定について訊ねられた時に思いついたことを片っ端から言い並べたが、そのいくつかが実際に使われ、結果として開発に貢献したと認められ、このゲーム内ではいくつかの優遇されることになっている。一番の優遇は、テストを終了し、正式サービスに移行した時点で発生するはずの、月額課金を免除し

てくれるというのだ。他にはちょっとした課金アイテムを融通したり、テスターとして新たに作るであろうアイテムやフィールド、ダンジョンなどにゴニョゴニョ……とも言われている。

嗚呼、素晴らしきはコネの力よ。

それに、俺はRPGやシミュレーションゲームなどが好きだから、単純にゲームとしても楽しみにしている。

やればやるだけきちんと糧になるところが、俺の琴線に触れるのだ。

現実が、あまりにあんまりすぎるから。

俺は不器用な上に運動神経も鈍く、スポーツ全般を苦手としている。

練習は苦にならない。身につかない努力を続けるのだって、ほんのわずかでも成長していると信じているから、続けていられた。

けれど、他人と競うとなると、話は違ってくる。みんなが早足で伸びていくなか、俺は一人で亀のような歩みで進んでいく。やる気がなかったり、最初から諦めている連中よりも、努力を惜しまない俺は下手くそなのだ。意気込みだけはあるだけに、それがとても辛い。実らない努力の実が、いつも目の前にぶら下がっているのだから、俺の心はいつも折れまくり、練習が終わる度、明日の練習に向けて折れた心を接いでいた。

だけど、ゲームは違う。

数値化された経験値は、きちんとキャラクターに蓄積され、やればやるだけ成長していく。結果が出せる。

重ねた努力が裏切らない世界。

俺みたいな人間にとって、これほど楽しい娯楽はない。

ただ、人一倍不器用な俺は、勉強に修練に目一杯時間を取らなければ目に見える成果を出せず、空いた時間もVRネットにあるコミュニティメンバーとの交流に費やしていたので、ゲームに割ける時間は極めて少なかった。

楽しみにしている新作ゲームだろうと、このままではプレイでき

る時間が減る。

だが。

だがしかし。

予定を減らせばその分の時間はガツポリ空くのだ。

俺は、土居心念流の稽古を辞めることに決めていた。

この流派、一度入門すると、どれだけ疎遠になっても門下生として扱われる。破門すらされることはない。

例えば、数年道場に顔を出さずとも、年始の挨拶もせず、鍛錬から離れ土居心念流の武技を鈍らせていようと、土居心念流門下生からは同門生として扱われる。

そして、もしも流派の技を悪用して問題を起こせば、一門会が介入してくる。問題が起きても結果法的に白なら保護。黒なら懲罰。法的に黒でも心情的に白なら、お金と権力でなんとかしてしまふ。これが逆の場合も、破滅的な意味でなんとかしてしまふ。

俺が入門したのには、理由があった。しかし、その理由はすでに消えてしまっている。消えたというか、解決した。

だから、毎朝毎晩稽古に汗を流す必要はなかったのだが、一度始めたことだから、納得がいくまで続けたかった。俺の性分だ。

テストの開始日程が決定してから、俺はずっといつ練習を止めようか考えていた。今日の小学生との組み手は、いい切っ掛けだった。色々と挑発とか嫌味とか言われたし。それもいつものことではあるが、それを止める理由にできたので心情的に楽だった。

テストは、明日、日曜の12時から始まる。

俺は期待に胸を膨らませながら、何度も見た公式サイトの情報を眺めているのだった。

その1：オープニングは船の上（上）

テスト開始当日。

開始十五分前から【ブレイン・コネクター】を頭に被り、俺は時計を凝視していた。

三分前から、VRMMORPG【ロスト】のログイン画面を表示させ、プレイヤーIDとパスワードを入力し、あとは決定ボタンを押せばいい、という状態で待っていた。

そして、正午と同時にIDとパスワードを送信。

ただ楽しみにしてるんだよ、と我が事ながら思わずにはいられなかった。

ログインと同時に視界は暗転する。

やがて、真っ暗な暗闇の中に、ぼんやりと光りが灯った。ぼやけた輪郭は次第にはつきりとしていき、それが惑星だと判別する。

くるくると自転する地球に似ているそれは、月のような衛生が五つも巡っており、地表には海とおぼしき青、森林地帯とおぼしき緑、極寒の地とおぼしき白、他には赤や紫など、何が地表を覆ったらそんな色になるんだ、というような色とりどりの姿を見せている。

やがて、惑星の回転が減速していき、雲に覆われている地域にフォーカスが合った。

ゴウッ

耳にうるさい風切り音がした。宇宙空間に風なんか無いし、いや、そもそも生身で宇宙遊泳なんて、と考えている間に、一気に惑星までの距離が縮まる。

距離が縮まるというか、これは

ぶつかるとっ！？

そんなことがあるはずがない。即座に否定しながらも、耳もとで

鳴る風音や、ぐんぐんと近づいてくる地表との相対速度に、それが映像と知っていても体が緊張するのと止められない。

やがて視界一杯に惑星が広がるようになって、雲海の中を突き抜けて、海を進む大きな帆船に落下する直前、俺は思わず目を閉じてしまっていた。

そして、ようやく。

うるさいほどだった風音がやんだ。

「……お、おお」

気がつくくと、俺はベッドの上に寝ているのだった。

ヘッドマウントディスプレイとしても使える【ブレイン・コネクター】は、頭から首までをすっぽりと覆うヘルメット型をしており、視力と聴力を遮断する構造になっている。

視覚と聴覚を、映像と音楽でVRのダイレクトセンシズをリンクさせ、神経に負担がかからないように【ブレイン・コネクター】と神経接続をする工夫なのだそうだ。

「まあ、手品のトリックみたいなものだよな」

右手に注意を惹きつけて、左手でタネを仕込んでおく、みたいな。頭を触り、【ブレイン・コネクター】を装着していないことを確認して、すでにVR空間内にいることを実感する。

ベッドに横たえていた体を起こし、周囲を確認。狭い板張りの部屋だ。窓はない。二畳もない狭い空間で、部屋とも呼べないような個室。あるのは、俺が乗っているベッドと小さな文机、それに棚。ベッドの陰も見てみると、鍵付きの貴重品入れを発見した。

次に、俺は自分の体に注意が向ける。服装は薄い半袖にハーフパンツ姿で、ペラペラの布製の靴を履いていた。なぜか靴を脱がずにベッドの上で寝ていたみたいだ。

えーっと。

それで、ここはどこだ？

コンコン

「はい？」

ノックの音に、反射的に返事をする。

鍵はかかっていたのかわかったのか、来訪者がドアを開いて顔を見せた。帽子、ジャケット、スラックスとワインレッドで統一された制服らしき服装の、二十代前半とおぼしき男性。目鼻立ちが整っていて、なかなか見れる顔だった。

第一印象で、俺はちよつと嫌いになった。イケメンは敵だ。

「こんにちは。船旅は楽しんで居られますか？」

「船？」

聞き返して、すぐにゲームのストーリーを思い出す。

「ああ、新大陸へ向かう船の中なんだっけ？」

「そうですね。はは、当船は海神様に守護されておりますから、例え嵐の中であろうと、船酔いするお客さまが出るようなことはありません。あまりに静かな船旅で、ここが海の真ん中だと忘れてしまっただけでしょう？」

単に現状が把握できていなかったただけの言葉に、男は勝手に納得し、乗船に対する自負を覗かせた言葉を聞かせてくれた。

「それで、俺にどんな用なんでしょう？」

なんとなく、年上に対しては自然と敬語を使ってしまっ。

「はい。私、客室乗務員のエイリヤ・ロシーと申します。ただ今、乗船券の確認のために客室を回らせてもっております。お客さまの乗船券を拝見させていただいてもよろしいでしょうか？」

「乗船券……？」

あれ、もうゲーム始まってる？

いやちよつと待とうよ！

普通、まずキャラクター作成からだろ。まだ名前も決めてないぞ俺。いきなりどうしろっていつのさ？

俺が慌てていると、

「お客様。所持品を確認する場合は、《アイテム一覧表示》と言う

か、手を振ってメニュー画面を表示し、アイテムと書いてある項目に指で触れるか頭の中で決定と念じるのですよ」

エイリヤは、客室乗務員らしい丁寧さで教えてくれた。

「……ひよっとして、チュートリアルに入ってます？」

「いいえ。このゲームにチュートリアルは存在しません。ゲームを遊ぶために必要な基本情報は、わからなければ私のように対話しているNPCがその場で察して、お教えするようになっていきます。ですので、ゲームの世界で過ごすうちに、自然と覚えられるように作られております。ああ、これは忠告ですが、ゲーム世界観を壊すような質問 例えばシステム面のあら探し などを過度に繰り返すと、【名声値】が下がりますのでご注意ください。それでもいいというのなら、私個人としては話を合わせるのに否やはありませんが」

愛嬌のある顔でウインクしてみせるエイリヤことNPCことAIに、俺は感心するしかなかった。

これくらいの人間味溢れる会話ができるAIは、珍しくはあるが無いわけじゃない。しかし、これを一から作り上げたと自慢していた『教授』は、なるほど確かに言うだけのものがあるようだ。

「わかりました。じゃ、普段の会話では、なるべく気をつけるとしますか。ああ、乗船券ですね。《アイテム一覧表示》」

コマンドワードを告げると、俺の顔から三十センチほどの位置に、半透明の情報ウィンドウが表示された。

たった一つしかない所持品に、その名前はあった。

乗船券（イシリア海の鷲号）

お金を払って船に乗っている証明となる券。

無くした場合、密航者として捕まる可能性もある。

乗船券に注目すると、補足説明が表示された。

「インベントリ内からアイテムを出す場合、テイクと告げ、出した

いアイテム名を呼んでください。複数個出したい場合は、アイテム名の後に個数を指定してください。個数が指定されない場合、一つだけ出ることになります。ウィンドウを使う場合、取り出したいアイテムの名称に指で触れるか、アイテムの名と個数を念じれば、取り出すことができます」

俺がアイテムの取り出し方に悩む前に説明してもらえた。

「ふうん。それじゃあ、今度は念じる方法を使ってみるか」

乗船券出る！

強く念じてみたのだが、乗船券は出てこなかった。

「ああ、正確には念じるだけではいけません。出そうとするアイテムを取るつもりで手を動かしてください。この場合は指で摘むように、ですね。ほとんどのアイテムは、手のひらを上にして待ちかまえていれば問題ありません」

言われるまま、俺は手のひらに乗船券が乗るように念じてみた。すると、手のひらの上に、硬い厚紙が乗っているのに気付いた。

「これでいいわけか」

VRゲームでは、当たり前のことながら、ゲームタイトルによって細かい仕様は変わってくる。なまじ体感してゲームシステムを学習するだけに、プレイ中に別のゲームでの癖が出ることなど日常茶飯事だ。

しかし、一分一秒が命取りになることもあるアクション要素の強いゲームでは、どれだけ面倒でも地道な確認と反復練習こそがミスを減らす近道なのだった。

ぼちぼち練習しないと、と心のメモに書き留めて、乗船券を工イリヤに渡す。

「はい」

「ありがとうございます、確認させて頂きます」

エイリヤは胸ポケットから手帖を取り出して開き、どこかのページと乗船券を見比べている。

「お客様。確認のためにご本名と人種を教えてくださいませんか？」

「名前？ ん、ひょっとして、ここでのやり取りってキャラメイクも兼ねてます？ これから言う名前が、正式決定ってことでいいんですか？」

これくらいなら名声値に影響しないだろう、と割り切って俺は質問する。

「はい。ですが、決められるのは名前と人種だけです。キャラクターの外観はランダムで決定されますし、初期パラメーターは各種族毎に固定されています。正式サービス開始後に、外観変更アイテムは有料販売される予定です」

有料アイテムかよ……。

「宣伝ですね、わかります」

「お客様。お名前を教えてください」

「スルーされた!？」

ま、ふざけるのはこの辺りにして、名前を考えないと。

俺は事前に名前候補を用意したりせず、キャラメイク時に名前を考えるタイプなのだ。

さて、名前か……。

「漢字はありますか？」

「はい」

漢字使えるのか……。いや、どうせ世界観は西洋風なんだし、こはやっぱり無難なカタカナ表記にしよう。欧米化万歳。

「決定。俺の名前は、アルヴィン＝ヤツシロ。ヤツシロが姓です。で、次は人種か」

なんとなく響きの良さそうな名前、ということであまり考えずに決定し、人種を選ぶことにする。

【ロスト】で選べるキャラクターは、大きく分けて三種族に分けられ、そこから更に複数の一族に枝分かれする。

大種族は以下の三つ。

人間種。

人獣種。

妖精種。

人間種は、あらゆる能力が平均的であり、他の種族との混血が産まれる唯一の人種である。種族は、人間、混血の二種類を選べるが、混血を選ぶと、他の種族の能力の傾向や才能を若干引き継ぐことが出来る。ただし、どの種族との混血になるかまでは選べない。

人獣種は、身体能力が高く、魔法に対する適正が低い種族だ。姿や能力に動物の特徴があり、犬族、猫族、鳥族、蜥蜴族が四大獣族と呼ばれている。他にも数多くの少数民族が存在しているが、キャラクターに選べるのはこの四種族だけだ。

妖精種は、地水火風の四大属性にそれぞれ依存した四つの人種の相称だ。地はエルフ族、水はマー族、火はドワーフ族、風はフェアリー族。共通する特徴として、魔法の才能が高く、特に依存した属性魔法は群を抜く威力を誇る。種族によって信仰できない神が存在し、各種族毎にはいけない【禁忌】と呼ばれる行動が存在する。メリットが多い種族ほど、デメリットが存在するというわけだ。この辺りの知識は、公式サイトからしっかり情報収集していた。このゲームをどう遊ぶか、で種族選びはとても重要になってくる。前衛職でバリバリ戦いたいのなら獣族だろうし、魔法使いで特に風に特化したいならフェアリー族を選ぶのがいい。さて、俺は何がしたいのだろうか。

戦闘はもちろんしたい。レベル上げとか大好物です。

生産職だって頑張りたい。素材を一から集め、鍛冶スキルを上げて自分が装備する武器防具を全部自作するとか大好きです。

色んな武器を使いたい。色んな魔法を使いたい。不器用な俺だから、器用貧乏でも、何でもできる自分になれる。

それなら、選べる種族は一つだけだな。

俺が選ぶのは短所のない人間種だ。ただ、ちょっと秀でた才能があればいいなあ、という欲もある。なので混血を選んでみることにした。

「種族は人間種の混血にします」

「はい、人間族混血種のアルヴィン」ヤツシロ様ですね。確認します……はい、乗船名簿にありました。ありがとうございます。乗船券をお返しします」

「どうも」

乗車券を受け取った瞬間、俺の全身から光が発した。

眩しくはないのだが、何も見えなくなるほど目映いという、矛盾した光。

その光が消えると、

「うおお！？」

手が小さくなっていた。

腕が短くなっていた。

視点が低くなっていた。

「なっ、なんだっ！？ 何が起きた！」

「お客様。種族の決定により、正式決定された外観に変更されました。先ほどの発光現象は、そのエフェクト光です」

つまり、今まで自分の体だと思っていたのが一時的なものだったと。

これから他人に見られるであろう、自分の姿が気になる。

「えっと……、鏡とか持ってます？」

「はい、ありますよ。どうぞ」

胸の内ポケットから小さな手鏡を手渡されて、恐る恐る覗き込む。

「うっ……わぁ」

銀盤の小さな窓からこちらを見つめるのは、美しい少年だった。

漆黒の直毛は肩よりも長く、瞳は同じく黒。男のくせにまつげは長く、切れ長で細い目の形。顔は小さくて、顎のラインがほっそりとしているのが、やたらと華奢に見える。鼻筋が通っているが彫りは浅く、はつきりとした印象を与えながらもくどさがない。唇は紅を指したように赤く、色白な肌のおかげで一層鮮やかに生えていた。美少年というか……美少女？

童顔なのか、それとも単純に幼いのか。顔立ちが整いすぎて、髪

型次第で男とも女とも見える外見だ。

今は、髪が長いので、どう見ても。

「女顔だ……」

ブサイクとか格好悪いとかよりはいいけどさ！ いいんだけどさ

！ 現実の俺のツラがさ！

オヤジ顔とか！

親方とか！

日本一角刈りの似合う高校生NO.1とか！

お前の映ってる集合写真、いっつも教師が二人映ってるよな、とか！

老けていてゴツイ顔にコンプレックス感じていた俺にとって、童顔女顔とか、コンプレックス刺激されまくりだぞ。

……正直、美形なのは嬉しいけれど。

「鏡、ありがとうございます」

俺はエイリヤに鏡を返して、気を取り直すことにした。

いいか悪いかで言えば、俺の外観は大当たりだ。それを嘆くだけでは、もったいなさすぎる。贅沢を言うのはやめて、【ロスト】の

世界では前向きにイケメン生活を楽しむとしよう。

気分が落ち着くと、手の中にある違和感に気付く。

乗車券が握りしめられていた。

……そういえば、さっき返して貰ってからずっと乗車券を握りしめたままだった。外観変更に関心を取られすぎていた。

俺が外観の変更に際して百面相をしている間も、客室乗務員然とした態度を崩さなかったエイリヤに視線で問うと、期待通りの答えをくれた。

「手に持ったアイテムをインベントリに格納する場合、イントウと告げ、その後に入りたいアイテムの名前を呼んでください。これまでと同じように、念じて仕舞うことが可能です。この場合、手に持っているアイテムのみが対象となります」

「《イントウ》乗車券」

手の中にあつた紙の感触が消えた。情報ウィンドウを呼び出してアイテム欄をチェックすると、きちんと格納されてあるのを確認できた。

「それでは、失礼します。航海は順調でしたので、さきほど目的地である新大陸が目視確認されました。この時間、前部甲板はお客様に開放されておりますので、天気もいいことですし、船上から眺めを楽しむのもいいかもしれませんよ」

今日で船旅も最後ですし、と締めくくり、エイリヤは退室した。

個室で独りになった俺は、まずこの中にある物を一通り調べるところにした。RPGと言えば隠された宝箱やアイテムを探すのは常道だ。自室の物だったらきつと備品も貰つても大丈夫！ 多分。

部屋の隅から隅まで探した結果、何も無いことを把握し、肩すかしをくらつた俺はがっかりしながら部屋から出ることにした。

目指す場所は甲板。せつかく船に乗っているのなら、大海原を見なけりやもつたいない。

途中、NPC船員とプレイヤーキャラらしき俺と同じ服装の人たちと何度もすれ違いながら、廊下の案内板を頼りに船内を歩く。

外の光が入ってくる階段を昇りきり、俺はようやく甲板に立った。外の眩しさに目が眩み。

閉じた目を開いた瞬間、視界に映つたのは一面のアオだった。

「うおーっ！ すげーっ！」
思わず駆けだして、階段から出てすぐ横の手すりから身を乗り出す。

透き通るような青い空と、深く澄み切った蒼い海。その二色が交わらずに描く水平線。その光景はあまりに壮大で、俺の胸は大きく高鳴った。

ただあるだけの自然な風景なのに、俺はどうしようもなく興奮してしまふ。

ああもつ。

こんな最高の景色を見せてくれたら、それだけでこのゲーム大好きになった。

手すりに掴まりながら下を見ると、海面はずいぶん遠くに感じた。およそ五階くらいの高さだろうか。案内板には、艦橋の屋根部分が展望台として開放されていると書いてあったので、後で行くことにしよう。

ようやく海と空から意識が離れた俺は、自分が乗っている船に意識が向き、そこでまた驚かされることになった。

まず、甲板。ちよつとした公園よりよっぽど広い。

続いて帆。塔のような帆柱が五本立っており、真っ白な帆は風を受けて大きく膨らみ、青空を背景にしてまるで入道雲が迫ってくるような迫力があつた。

そんなスケールの大きな船の艦橋は、当然ながらその規格に合った物で、まるで商業ビルのような容積を持った建物だった。

現実ではあり得ない巨大帆船の存在に、俺は思わず笑ってしまつた。やり過ぎだ、いいぞもつとやれ。

甲板を見回すと、多くのプレイヤーの姿があつた。見晴らしのいい前方には鈴生りになっており、甲板から展望台へと続く階段には、行列ができていたようだった。

客室に続く階段は艦橋の壁際にあり、人の通行は激しいのだが俺が立っている場所は、人の流れ的に袋小路、あるいはエアポケットとなっていた。それなら、と俺はこの場所でゆっくりと景色の楽しむことにした。

景色を眺めているうちに、頭の中は空っぽになり、五感の情報だけに意識が傾いていく。聴覚や視覚、触覚に嗅覚。例えば、温い潮風とザアザアと波を切る音。あるいは、強い日差しが肌を焼くジリジリとした熱。眩しい太陽、海と空のアオ。生温い潮風。

俺は一瞬、仮想空間にいますという事実を忘れていた。

「すっげーなー。こうというのが作れる時代になつたんだなあ」

【ロスト】世界の五感再現率の高さに感心していると。

「きゃー！ ステキだわ！」

新たに階段を昇ってきたと思われるプレイヤーが、俺のすぐ横の手すりに飛びついて歓声を上げた。

うんうん、良い景色だよな、と俺の感動に共感している人を見てなんとなく嬉しくなっていると、

「ねえ、凄いわよね？」

いきなり俺に話しかけてきた。

「ああ。凄いな」

騒がしいのは苦手だけど、心が浮き立っている今は嫌な気にもならない。気分そのままに笑顔で応える。

「これはしばらく入り浸って楽しまないといけないわ」

「まるで義務みたいな言い方だな」

「義務というか……使命？ ゲーマーとしての。いえ、遊び人としての！」

彼女は、不敵な笑みを浮かべ、グツ、と拳を握った。

彼女の頭から生えている三角形の耳と腰のあたりから伸びる尻尾は、彼女の興奮を表現するかのようにせわしなく動いている。

初期装備である服装は性別に関係なく全員同じものようで、半袖とハーフパンツから覗く手足は、肘と膝の先から動物の毛皮を纏っているかのようだ。黄色に黒い斑点が散らされているところから見て、獣族、それも豹の特性を引く猫族なのだろう。

「獣人種？」

「いえーす。体を動かしたい気分だったからね、戦闘で動き回れるのが楽しみだわ。ところで猫族なあたしは語尾にニヤとかつけた方がいいのかな？」

「いらん」

「じゃあ笑おう、猫っぽく。にゃはははは」

「意味わかんないぞオイ」

切れ目がちで凜々しい顔立ちなのに、さっきから笑ってばかりで

愛嬌ばかりが目立つ奴だった。

獣人種の顔をはじめて間近に見たが、瞳の虹彩が動物そのものであること以外、人との違いはなさそうに見える。

……ああ、耳がけもの耳だったな。人間と同じ場所にある耳は、毛がふさふさしてる。

なんとなく、人との違いが知りたくなって、彼女の体を観察してみる。

身長は俺より高く、体つきはただ立っただけで柔軟さを感じさせる曲線が見えた。胸は薄いようだが、スマートな体つきは女性らしさよりも野生を強く感じさせて、まるで動くために不必要な部分を削いだみたいだ。

肘先と膝先からが獣毛に覆われているが、まるでそういうデザインの長手袋とブーツで着飾っているようで、野性味溢れる彼女の魅力と抜群にマツチしている。

彼女は熱心に海面を眺めていて、俺の視線には気付いていないようだった。

「ね、ね、ここから海に飛び込んだらどうなるのかな」

「はあ？」

突拍子もない発言に、俺は笑い飛ばそうとしたが、好奇心が刺激されて真面目に考えることにした。

「ん……。そうだな、禁止行動に指定されていて、そういうこと出来ないようになってるんじゃないか？ それか、進入禁止エリアに指定されていて、見えない壁にぶつかるだけとか」

VRゲーム全般に言えることだが、プレイヤーが行動できる空間が広ければ広いほど、システムに負担はかかる。それがオンラインならば、回線とサーバーへの負担も加わる。よって、オンラインVRゲームでは、そういうゲーム性に関わらない部分は、無駄として削除されることが多い。

冒険の舞台である新大陸でなら、全地域が行動可能フィールド化されていそうだが、いくらなんでもオープンングイベントであろう

この船上で、そんな自由が許されているとは思えなかった。

「もしも飛び降りたとしたら、やっぱり死んじゃうのかな？ 死んだとしたら、どこで復活するのかな？ この海って塩辛いのかな？ 猫族って泳げるのかな？」

疑問を一つ口にする度に、彼女は分からないことが不快なのか、眉根を寄せて不機嫌になっっていく。

「いや、知らんし。とりあえず、泳ぐのとかは新大陸に着いてからでも確かめられるだろ」

「あたしは今知りたいのよ！」

【ロスト】初プレイの俺に、彼女の疑問に答えられる経験があるはずもない。

初対面の人物の我が儘に付き合ってられるほど人付き合いの良くない俺は、キャッチボール中だった会話ボールを暴投することにした。

「だったら試してみろよ」

「それもそうね」

「え」

予想外の反応。

言うや否や、彼女は手すりに足をかけて空中へと飛び出した。

「やりやがったあああああああ！？」

俺が考えもしない選択肢を目の前で選ばれて、思わず絶叫してしまった。

これはゲームの世界だ。だが、VRゲームは限りなく現実に近い再現性がある。だからこそ、危険な行為や無謀な行動はやれるとしても、本能が拒絶してしまう。これは現実だと、心が誤認してしまうのだ。

なのに、彼女は一瞬の躊躇もなく、船から飛び降りた。

それすなわち、仮想と現実の区別をしっかりとつけられるということ。VRゲームの遊び方を熟知しているとも言えるのだが、まだその域までVRゲームに慣れていない俺は、度肝を抜かれつつも、

彼女の思い切りの良さに感心してしまう。

「すげー。あいつすげー。俺は真似しようとも思わないけど、見ている分には楽しすぎる。」

「にははははははは！ 見よ、あたしは今、鳥にな」バチャーン！

……ぷかり

着水して沈み、すぐに浮かび上がった彼女は、背中と後頭部だけを見せるだけで、脱力している様子だった。

あれ、顔上げないと息できないんじゃないのか？

「無茶しやがって……」

ぴくりとも動かない体はゆらゆらと波に揺られ、当然ながら推進力なぞないわけで、進む船に置いて行かれて後方へとみるみる遠ざかっていく。

……死因は溺死と墜落死、どっちだったんだろうか。

「惜しくない人を亡くしたな」

南無、とおざなりに片手で祈り、俺は再び景色を楽しむために視線を水平線へ向けた。

「自室で復活したわ！」

「おかー」

十五分後、豹女が再び姿を見せた。

「海水はしょっぱかったわ。あと痛い」

「ほう。海水浴に行くのが楽しみだな。あと痛いのは自業自得だ」

しばらく、命がけで手に入れた情報で、話が盛り上がるのだった。

その2：オープニングは船の上（中）

【ロスト】の世界内でたまたま最初に話したのが俺だったという理由なのだろうか。

好奇心で船からダイブして死ぬ、という愉快的死因から復活した豹女から、俺は話し相手として見込まれたようで、しきりと話し掛けられていた。

「ところで、さっきからずっと気になっていたんだけど、あんたって男？ それとも女？」

「……男だけど、だから何だよ。見て わからないよな。口調で察してくれ」

「男！ よくそんな可愛い外観を引き当てたわね。リアルラック使い果たしたんじゃない？」

「縁起でもないことを言うなよ！ いくら見栄えがよくてもな、こんなマニアックな外観に運を使い果たすなんて おい。

おい、やめる。

ズボンを下げようとするな。いや、だからって直接触ろうとするな！」

「男の娘？ こういうのって男の娘っていうのよね！」

「いや、知らないし。だから確かめようとするなって！ にじり寄るな！ そんな嫌な手の動きを俺に見せるな！ ハラスメント行為でGMに通報するぞ！」

「ちえーっ。わかったわよ、やめるわ。代わりにスカート履いて見せて」

「うるさい。代わりってなんだよ。履く義理なんてないぞ」

「自分のこと私、って言ってみて！ ボクでもいいわよ！」

「もうお前めんどくさい」

うっとうしくはありつつも、俺はこれまで言われたことのない囃し立てられ方をされて、そこはかとなく嬉しくもあった。

「今度一緒に寝ましょう！ あなた可愛いから抱き枕にいいと思うのよ」

なんて女の子から言われるなんて、現実じゃ考えられなかったよ！ 例え偽の姿、ゲームの話でも嬉しかった！ なんかそれだけで全てを許せる気分だったので、俺は彼女のマシンガントークに付き合っていた。

展望台を見に行かない？ と豹女が誘ってきたのは、満足しきった表情でしばらくまったりしていた時だった。

俺も展望台に行くつもりだったので、断る理由もない。

そうして、俺たちは上り階段の行列の一部と化していた。

「RPGゲームで遊んでいるはずなのに、気分は観光地にやってきた旅行者だわ」

「それもVRゲームの魅力の一つだと思うぞ。リアルさが売りなら、特にな」

人混みに埋もれながら、俺は新鮮な体験をしていた。

現実では長身だったので、人に囲まれても視界を遮られることはあまりなかった。しかし、今は四方八方に人の姿しか見えない。不便を感じるよりも、面白い、と観じてしまう。

リアルとヴァーチャルの違いについてひとしきり話が盛り上がった後、種族によるステータスの違いについて興味が向き、お互いに能力値の確認し合うことになった。

ステータスには、戦闘で自キャラの生存に直接関わる、生命力、精神力、スタミナという項目があり、これらは視覚的にわかりやすくゲージとして表示されている。

また、あらゆる行動の基盤となる基礎能力として、筋力、知力、敏捷、器用、体力、幸運の六種類がある。

基礎能力は、種族固定であり、パラメータ変更などは出来ない。こつという理由もあって、種族選びが重要になってくるのだ。

他にも、キャラクターの社会的な立場を数値化した名声値などがある。

「名前」 アルヴィン＝ヤツシロ

「LV」 1

「生命力」 38

「精神力」 49

「スタミナ」 36

「筋力」 8

「魔力」 8

「体力」 8

「敏捷」 8

「器用」 8

「幸運」 20

「名声値」 0

「特性」 【人の和】 【幸運の星（五等星）】

なんとという微妙なステ。

しかし、なんでこんなに幸運偏重？

人間種って平均的な能力が売りじゃなかったっけ？

……………ん、そうか。

種族で混血を選んだのが原因だ。

どんな種族の血が入って、こんなに運に偏っているんだろう。気

になる。いつか親の血筋を判明させたいものだ。
ところで、この特性というのはなんだろう。

情報ウィンドウの【人の和】という名称に触れてみると、詳細が表示された。

【特性】人の和

人間種は、全人類と仲良くできる才能があります。

あなたが誠実であれば、どんな相手でも心を開いてくれることでしょう。

【効果】

コミュニケーション時、あらゆる種族に対し、警戒度に若干のマ
イナス補正。

コミュニケーション時、あらゆる種族に対し、好感度に若干のプ
ラス補正。

……なるほど。これは、どうやら人間種の固定能力みたいだ。

となると、【幸運の星（五等星）】もそうか？ いや、どう考え
ても違っただろうな。幸運関係だから、人間種じゃない方の親の特徴
だろう。

これって、役に立つ特性なんだろうか。（五等星）というのが、
そこはかたなく期待できない匂いを漂わせているけど。

一応、調べておこう。

【特性】幸運の星（五等星）

幸運の星が、あなたの頭上に輝いています。

光が強ければ強いほど、あなたはあらゆる場面で偶然に助けられ

ることになるでしょう。

【効果】

あらゆる判定での失敗時、5%の確率で成功確率33%の再判定が発生する。

戦闘時、クリティカル判定に+3%。非クリティカル判定に-3%。

んん？ この特性は……ちょっと、面白いんじゃないか？

特に、判定失敗時に再判定が入るといふ部分だ。

あらゆる判定、と書かれているが、【ロスト】の世界は、ゲームの世界。デジタルな世界なのだ。

例えば、命中やクリティカルといった戦闘での判定。

例えば、鍛冶や調査といった、生産スキルでの成否判定。

真実、何がどこまで「あらゆる」なのかは不明だが、こと俺に関しては、万が一、なんて低い確率とは疎遠な存在になるということだ。

どんな可能性でも期待値で1%以上あるのだ。数字にすると百分の一。

万が一ですら、百倍の確率で成功してしまえたら、もはや奇跡の叩き売りだ。

そう考えると、これはかなり有益な特性だ。

……ステータスを考えると、プラスマイナスゼロになっている気もするけど。

幸運特化で、俺にどうやって冒険しろと言っただろうね。

全体的に弱体化した器用貧乏とか、マゾすぎる性能だろ。そういう遊びは、全クリしたゲームで制限プレイするときにやるもんじやなかるーか。

俺が自分の初期ステータスについて、喜ぶべきか嘆くべきか悩ん

でいると、隣から脳天気な声が響く。

「あれ？ あたし【名声値】が・330だった」

なんだか彼女は楽しそうにそう言った。それが大きいのか小さいのかわからないが、楽しめるものじゃないと思う。

「……俺の【名声値】は0だな。デスペナじゃね？」

「あたしもそう思うわ。んー、敏捷重視なステータスだわ。全種族の、ステータスの違いとか知りたいなあ。……あつ、ねえねえ！

こんなのがあった！」

「こんなのって？」

ステータス画面は、プライバシー保護の理由からも可視、不可視と切り替えることができるのだが、彼女のステータス画面が可視状態になったので、見ていいのだと判断して遠慮無く覗く。

まだ初期装備でレベルも上がっていない状態で知れるのは、せいぜい名前くらいのもだろう。

「名前」 めめんと＝もり

「LV」 1

「生命力」 64

「精神力」 30

「スタミナ」 92

「筋力」 12

「体力」 13

「魔力」 2

「敏捷」 18

「器用」 8

「幸運」 7

「名声値」 - 330

「特性」 【野性】 【獣化】 【暗視】 【身軽】 【柔軟】

【魔法非才】

「称号」 【常識外れ】

目に入った彼女の名前は、ひらがなだった。

「めめんと「もり」？」

メモント・モリ。

何語だったっけ。ラテン語？ フランス語？ 確か意味は、死を忘れるな、死を記憶せよ、とかいう意味だった気がする。

「もり、を漢字で『森』にしようかどうしようか、最後まで悩んだわ」

「頭悪そうな名前だな。略してメモリと呼ぶことにしよう」

「好きにきなさいよ。そんなことより、ここよ、ここ」

と、彼女がウィンドウを指差す。

彼女が指差したのは称号の部分。

【称号】 常識外れ

あなたの常識に囚われない行動は、良くも悪くも人々の耳目を集めます。

少しくらい落ち着いた言動を心掛けてもいいのでは？

【効果】

名声値の変動の、上昇値、及び下降値に、10%の補正を加える。

【解除方法】

本（冒険者のマナー100選）を読破する。

「……うん、俺には称号がない。聞くけど、称号を確認したのは今が初めてか？」

「そうよ」

「と、いうことは、キャラ作成時にランダムで貰えたのか、そうでなければ」

「身投げした時に称号獲得したのかもね」

それは確かに常識外れと呼ばれるにふさわしい。うん、間違っていない。

しかし、船からダイブするだけで得られるとか、安い称号もあったもんだ。しかもデメリットがあるとはいえ、数値変動に10%プラスとか、地味に効果が高いと思うし。

「【名声値】の-330、30は補正の分って考えていいよな」

「じゃあ、あたしが死ぬ前にはこの称号を持っていたことになるわね」

「飛び降りて称号獲得できるのは確定かあ……」

微妙な気持ちになる俺とは裏腹に、メモリは称号を得られたことが嬉しそうだ。

「解除方法って書いてあるけど、称号って自由に効果のオンオフを選べないのか？ 解除に手間がかかる分、解除イコール消滅な気がする」

「どうだろ。ヘルプメニュー見てみたんだけど、未実装で使えなかったし。ステータス画面もあちこち触ってみたけど、【称号】はいじれないみたいよ。持っている限り効果はあるみたいだから、パッシブスキルと思えばいいのかしら」

「そういうシステムなら、複数の称号が持てないと辛いなあ。消さ

ないと新しい称号手に入らないとかだったら、称号の取得方法を探したりしなきゃいけないし、面倒くさすぎるぞ」

「この、冒険者のマナー、っていう本は売ってるのかしら？」

「かもな。もしくは、図書館みたいな施設があるのかも」

うーん、と二人で顔を付き合わせて悩む。

二人で予想を話し合ったり、情報ウィンドウで確認できる項目の確認などとしていくうちに、待ち時間はあつという間に過ぎて、俺たちは展望台にたどり着いた。

高所に立つことで海面が遠くなり、視界に広がる海がより一層大きく見える。混雑しているせいでゆっくりと風景を楽しめないのが残念だが、これはこれで観光気分になれるからよしとしよう。

「あつ！ あれが新大陸じゃない？」

「おおつ、そうだな。あれかー」

船の進行方向に、親指の先ほどの大きさの陸地が見えた。さすがに小さすぎて、まだ到着までしばらくかかりそうだなあ、としか思えない。もっと近づいて陸の形が分かるようになれば、もっと盛り上がるんだけどなあ。

展望台から見えるパノラマは素晴らしいが、後ろを見ると、大樹のように伸びるマストと、その巨大な船体も一望できて、なかなかの迫力があって見ごたえ十分だ。

「それにしても、あの銅像はなんなんだ。気になる」

展望台のご真ん中、俺の身長くらいある台座の上に、三メートルほどの銅像が置かれていた。三つ又の矛を右手に、水差しを左手に持った、顎髭で顔の下を覆った男性の像だ。肩から布をまとうだけの姿だが、肩から伸びた腕は筋肉で盛り上がり、胸板も分厚く作られていた。

「なんか立て札あるわよ。像の由来でも書かれてるんじゃない？ 見に行きましょう」

近づいてみると、像の台座に打ち付けられたプレートに【雨と海の神ネリオスの像】と書かれているのがわかった。

「海神？ ポセイドンのパクリか」

「いいえ、ネプチューンよ、きつと」

身も蓋もないことを二人で言い合う。

「なんであんな像があるんだろうな？」

「験担ぎとかじゃない？ ほら、船乗りは迷信深いとか言うし。船に女を乗せたら嵐にあう、とか昔は信じられていたらしいわよ」

「あー。船の守りにフィギュアヘッドを作ったり、とか？」

でかい銅像立てておけば守って貰える気になるもんな。そういう細かい設定まで考えて作ったのなら、ゲーム制作側の徹底した仕事ぶりに賞賛を送りたい。

「あ、双眼鏡が空いてるわ！」

展望台といえばおなじみの、お金を入れて動く真つ白い双眼鏡。

メモリは目ざとく人の切れ間を発見し、駆けていくと文字通り双眼鏡に飛びついていた。

あの双眼鏡、現実と同じく有料なのか？ ……あ、なんか入れているみたいだ。やっぱり有料か。そういえば、初期デフォルトで所持金が1000GRあったな。

あいつはあいつで楽しんでるみたいだし、俺は俺で、銅像の横にある看板に書いてあるであろう設定を読むことにする。

えーと、何々。

【ネリオス様と船乗りの願い】

新大陸の近海には、そこを縄張りとする巨大な海の魔物が住み着いている。

新大陸付近を航行する何隻もの船が、その魔物に襲われ鎮められた。

困り果てた船乗りたちは、救いを求め海の神に祈った。

すると、とある船乗りに、天啓が下ったのだ。

自分を模した銅像を乗せなさい。そうすれば、強大な存在から船

を守ってあげましょう。

お告げを信じた船乗りは、私財を投じて立派な銅像を船に乗せた。そして、船は海の魔物に襲われた。しかし、その銅像を乗せた船は、海の神が守護し、見事に魔物を撃退、無事に目的地にたどり着いたのだった。

それ以来、新大陸間の航路を行く船には、海神の銅像を乗せていくことが慣例になったのである。

「なるほどなあ」

他にも看板には、海神の信者になると乾きとは無縁になるとか、槍を武器として戦う者に祝福が与えられる、など書かれている。つまり、海神の信者は槍を装備するとボーナスがつくんだな、とシステムナイズな考え方で理解。乾きと無縁、という部分はいまいち理解できないが。

「神様が実在する世界か。しかも、実際に守って貰える実感があるってというのは面白いな」

神にすがったらフレキシブルに救いの手が伸ばされるなんて、現実の宗教じゃ考えられない。さすがファンタジー。さすが空想世界。「いつか神様の実物が見られるのかもな」

例えばそれが作り物だとしても、神という信仰対象とコミュニケーションが取れるという世界観が実に興味深い。雨と海の神だという銅像を見上げ、俺はいつか来るであろう未来を楽しみにした。

ギロリ

「……………」

なんか、銅像の目が動いたような気がした。

ははは、まさかそんなことがあるはずがない。自分の勘違いを笑う。

ジーーーーー

というか、現在進行形で目が合ってる。

怖っ！ 銅像動くの怖っ！ ちょっとしたホラーなんて目じゃねえぞ！

「ノーノーノー。俺、楽しみ、未来。今、違う」

思わず言い訳して後ずさる。うわっ、動揺しまくってるな俺。片言になってるのを自覚してるのに口調を直せない。

唸る野良犬と相対した気分。目を逸らしたら飛びかかれるような緊迫感。神様を犬に例えるとか、知られたらバチとか当たるのだからうか。

なんでこんなことに。俺、何か悪いことしたっけ？

心底逃げ出したいのに、銅像と見つめ合うのを止められないという最悪な罰ゲームが続いていく。

と。

銅像が、

「浮いたーっ!？」

そして、首を船の進行方向から見て右へと向け、

「飛んだあああああああああああああああああ!!!??」

銅像が動き出すという、あまりに脈絡のない異変に、俺は思考を放棄していた。

銅像の異変に気付いていた、他のプレイヤーたちからも驚きの声が上がった。みんな銅像の飛んでいった方向を視線で追っている。

次第に小さくなっていく銅像の周囲に、紺色のもやのようなものが集まるのが見えた。もやがどんどん集まっていき、濃密な塊になっっていく。

銅像はそれに矛を突き刺し 海面へと投擲した！

ドオオオン

海面がはじけ飛び、巨大な水柱が立った。遠雷のような、重い響きが後から届いていた。

水柱が重力に引かれ形を崩していくと、

「蛇……?」

まるで水柱の中から現れたかのように、蛇のような生き物の姿があった。

遠目にもはつきりと見える太く長い胴。海面からかなりの高さまで昇って言っているのに、まだ尾の先が見えないほどに長い体。

あの銅像が動き出した理由は、おそらくあの魔獣に攻撃をするためだろう。

どうして、動く銅像などという異常現象が、わざわざ攻撃をした？ その理由は？

俺の疑問は、すぐに解答が得られることとなる。

大蛇が、吼えたのだ。

キイイイカアアアアアアアアアアアアアアアアア！

それは、身の毛もよだつ、咆吼だった。

まるで肌を掻きむしられるかのような痛みと、背筋を凍らされて碎かれるような怖気。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！

アレの近くにいたくない！

ただ、その声を聞いただけで理解した。してしまった。

あれは、人が出会ってはいけないものだ。

敵対してはいけないものだ。

怖くて逃げ出したいのに、ここは残念ながら船の上。

逃げ場などない。船内に隠れても安心できない。アレに襲われて、船が無事だという未来が想像できないのだ。

逃げられないなら、戦うか？

はっ、冗談。あんなのと敵対するくらいなら今すぐ首掻き斬って自殺する方が気が楽だ。

どうする、どうすればいい？

「そつだ！ ログアウトすれば逃げられ」

ログアウト？

はっとする。

ここは、ゲームの世界じゃないか。

仮想空間での戦闘が現実の肉体に影響があるわけがないのに、何を本気で命の危険を感じているんだ。

正しく現状を理解し、緊張していた四肢から力が抜けた。

俺一人だけがあんな怖い想いをするのは不公平だ。展望台にいるプレイヤーに、俺と同じ気持ちになった仲間はいないのか、照れ隠しと負け惜しみからさり気なく探してみる。

俺の周囲にいるプレイヤーの見る顔見る顔、真っ青になって額に汗を浮かべながら、海の向こうの大蛇を食い入るように見つめていた。

ああ良かった。怖がってたのは俺だけじゃなかった。仲間が一杯だ。

って。

洒落になってねえよ！

あんな鳴き声一つで、これだけの大人数を恐怖のどん底に落とすとか、どんなモンスターだよ。いや、ただのモンスターであるはずがない。間違いなくボスクラスだ。

あれだけ恐ろしい存在だということが、逆説的に正体を教えてくれた。

つまり、だ。

あの大蛇こそ、先ほど銅像の横にあった立て札に書かれていた、新大陸の近海で幾隻もの船を沈めた海魔であり。

海魔に先制攻撃をしたのだと分かる銅像は、まさしく雨と海の神ネリオスが船を守るために現界した姿なのだろう。

ネリオスは、大蛇が船に近づこうとしない限り、攻撃するつもりはないようだ。大蛇と船の間の空間に浮かびながら、じっと警戒を続けている。

そんな神の姿をあざ笑うかのように、大蛇はその長い体を波立たせ、ゆっくりと見せつけるようにして、海中からその全身を引きずり出した。

まず、驚くのがその大きさだ。

百メートル以上は離れているはずなのに、銅像の元の大きさを間近で確認しているおかげで、海魔の長さが嫌でも理解できた。

銅像と蛇型魔獣の大きさと比べると、ハツカネズミとニシキヘビほどになるだろうか。

……あんなデカブツに襲われたりしたら、今乗ってる大きさの船でもあつさり沈むわ。神頼みしたくもなるってもんだ。

桃色の派手なたてがみを持ち、体には棘を帯のように幾重にも巻き付けているのが見える。体表の鱗は、太陽の光を反射してぬらぬらと輝いていて、表皮が蠢いている様が遠目からでもはっきり分かった。

大蛇の巨体が、ゆらゆらと左右に揺れる。

ネリオスの宿った銅像は、泰然自若と静止している。そして。

大蛇が、人など軽々と丸呑みできるほどの大口を開き。

銅像へ向かって飛びついた！

ドウッ！

ネリオスが三つ又の矛を一閃し、自分の数倍も大きいであろう大蛇の頭を叩いて弾く。

しかし、弾かれた頭の勢いをそのままに、大蛇は全身し、尾をしならせて銅像を叩く！

今度は、銅像が海面に叩き落とされた衝撃で、巨大な水柱が立ち上った。

近海の主とされる大蛇は、銅像には見向きもせず、最初からの目標であろう航行を続けるガレオン船　つまり、こちらに向かつて直進してきた。

ぐんぐん近づいてくる巨体に、このままあつさり沈められるのでは、という嫌な想像をするや否や、再び海面が破裂。

海中から飛び出してきた銅像が、大蛇の下あごに体当たりをし、再び大蛇の体をはじき飛ばした。

大きく仰け反るようにして、大蛇はようやくこちらへ向かうのを

止めた。ゆっくりと鎌首をもたげ、船を守るために立ちはだかる銅像に、顔を向けた。

そして。

双方が飛び出した。

体当たり。はじけ飛ぶ。

殴る。体をたわませる。

体当たり。吹き飛ぶ。

殴る。海面に落ちる。

ズガアン、ズドオン、と離れているのに体に響く勢いでぶつかり合っている迫力に、恐怖に硬直していたプレイヤー達が驚きによって解放された。

どよめく展望台のプレイヤー達の中で、

「きゃー！ すごーい！」

一人だけ喜色満面の声を上げている奴がいた。あの豹女はこんな時でもブレないなあ。あいつを見ていると、このイベントを楽しめないのがもったいなく思えてくるから不思議だ。感化されてるのだろうか。

銅像と巨大蛇の戦闘を、それでも展望台にいるプレイヤーのうち十分の一ほどは、楽しそうに見物しているようだった。これがゲームだと割り切ってしまうえば、あの戦闘もイベントシーンの一つだと理解できるのだろう。

危機感を盛り上げるかのように、NPC船員たちにも動きがあった。

「お客様に申し上げます！ 本船は魔獣の襲撃を受けており、ネリオス様の加護があるとはいえ、安全のために船内から出ないようにお願いします！ 他の魔獣の襲撃があった場合でも、甲板や展望台が戦場となるため、非常に危険です！ 船内は安全ですので、皆さん避難してください！」

船室に続く階段から駆け上がってきた船員が、大声で告げた。

船員が一人姿を見せると、続けて二人、三人と姿を見せはじめ、

口々に避難誘導のための言葉を叫びだした。

「皆さん！ 慌てず落ち着いて、しかし急いで避難してください！ 外へ出しないで下さい！ 船内は安全です！」

プレイヤーたちは、その言葉を聞いても、すぐには動き出さなかった。誰も動いていないから。集団心理が働いて、他人と違う行動を起こすのに消極的になっているのだ。

そんな間にも、切羽詰まったNPC船員は避難を叫ぶ。

そしてようやく、そんな声に背中を押されるように、一人、展望台から階段を降りていくと、その後続く人の流れができあがっていく。

避難するプレイヤーを横目に、俺はどうしようかなあ、と考える。大蛇と神の派手な戦闘は、なかなかの見物なのだ。見逃すには惜しい。

そんな時。

「伏せろっ！」

誰かはわからない。

若い、少年らしき年齢から出た、年齢に不相応な鋭い声。

ほとんどのプレイヤーは反応できない。いや、反応しようとしなかったのだらう。

「っ」

俺は、望遠鏡に齧り付いていたメモリが弾けるようにして伏せたのを見て、自然と指示に従っていた。

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイ

「がつ！？」

耳から腕を突っ込んで脳みそを直接握られてブン回されるような振動に、俺は耳を押さえて我慢することしかできない。

いつてえ！ 頭いつてえ！ なんだこれ！？

例えるなら、雑巾を絞るように脳味噌から水分を取りだされていく具合。

スリルやリアルさを求めるならこんな苦痛もエッセンスになるが、娯楽を求めるゲーマーには間違いなく不評な要素になるだろう。そして、俺は自分で自分を追い詰めるのは苦にならないが、他人から殴られる痛みは大嫌いなタイプである。

頭の内側から響く鈍痛に苦しみながら、痛みのフィードバックの容赦の無さに、今後の冒険者生活が憂鬱になる。

甲板の板床の上で苦痛に身悶えしているうちに、振動は収まった。振動の余韻が目眩のように俺の三半規管を狂わせている。

しかし、視覚に問題はない。その無事な視力が、周囲の状況をしつかりと俺に理解させた。

ほんのわずかな間に、展望台にいたプレイヤーたちは二種類に別けられていたのだ。

その二つとは。

頭があるプレイヤーと、頭がないプレイヤーだ。

「うげえ」

痛む頭を支えながら、首のない死体が林立している様子を眺める。直立した死体の密集している様子というのは、ちよつとした地獄絵図だ。

そのあまりの凄惨さに、見ているだけで心と体、双方から吐き気がしてくる。

幸いなのは、死体から血が一滴も流れていないことだろう。倫理コードに触れるグロさは排除されている。排除されていて、こんな悪夢の光景、というのは閉口せざるをえない。

やがて、首のない死体は色褪せて灰色になっていき、まるで壁画が剥がれ落ちるように、パリパリと体が崩れていく。地面に落ちて、粉々に砕け、塵よりも細かくなって消えていく。

死体が次々に崩れていくその様子は、幻想的でしたらあった。

死亡したキャラクターは、こんなエフェクトで消えるのか。生々

しさの欠片もない様子に、俺はほっとしていた。死に様までリアルさを追求されなくて良かったと、心の底から思う。グロイの苦手。そうして、展望台に残った人影は、俺を含めて五つだけだった。伏せていた体を起こし、その場にあぐらを組んで座る。頭の痛みがちつとも取れなくて、立ち上がる気になれない。

「ここには、百人以上いなかったか……？」

頭痛からの逃避に独り言を呟くと、期待していなかった返答があった。

「危険に対して悠長に構えていると死ぬ。ゲームとはいえ、当然だな」

俺の呟きに、すぐ横で倒れていた生き残りが応えた。金髪の髪と長い耳を持つ美形の男性。おそらくエルフ族のプレイヤーだ。仰向けになって額を押さえている。おそらく俺と同じように、頭痛に悩まされているのだろう。

「うわー、甲板に出てたプレイヤーも全滅くさいよ」

展望台から甲板を眺めて、のんきな声で洒落にならない報告をするメモリ。

その言葉を聞いたのだろう、四つんばいになって呆然となっていた少年が、飛び跳ねるように立ち上がると、甲板が見える位置まで駆けだした。

立ち止まり、五秒ほどじっと見つめた後、がくりと肩を落とした。「百メートル以上先からの攻撃で根こそぎとか、あのバケモノどんだけ殺る気まんまんなんだよ。いくらレベル上げて倒せる気がしねー。無理ゲーくせー」

腕と足に羽毛を纏わせた、おそらく獣人種鳥族の少年が、遠くにいる海魔を睨みつけながらぼやいている。その聞き覚えのある声に、警告を発したは彼だと確信する。

頭の痛みは取れないが、我慢すれば話せるくらいに収まってきていた。

俺が生き残れた理由の半分は、彼のおかげだ。感謝の気持ちを伝

えたい。

「あんたが声かけてくれたおかげで、助かった。ありがとう」

「ふん」

鼻を鳴らして尊大な態度を見せる少年だったが、口元が嬉しそうにほころんでいるのが見えた。このツンデレめ、と思えば彼の態度に腹も立たない。

「どうして、危ないってわかったんだ？」

初見である見えない攻撃を見切れた理由が知りたい。

「ん？ ああ、あのでっかい海蛇モドキが、大口開いただけで、神様吹っ飛ばしてんのが見えたからな。で、海蛇が神様吹っ飛ばした途端にこっち向いて口開いてたら、ヤベーに決まってるんだろ」

「そうだったのか」

危ない、と思っただけでも、俺だったら警告しようなんて考えもしなかったな。無意識に、神様の銅像と近海の主の戦いは、ゲームのイベント、盛り上げるための見せ物だと信じ切っていた。

そろそろ、頭を切り換えてゲームだからという決めつける考えをなくさないとな。俺が反省していると、ぶつぶつと独り言を呟いているのが聞こえてきた。

「展望台で伏せたら助かったのに、甲板で全滅って、高さは違うのにどうということなんだろう？ あの攻撃の攻撃範囲と命中判定が知りたいなあ」

身長が一メートルほどしかなく、背中から半透明の羽が生えている少年が自分の思考に浸っていた。柔らかな栗毛と幼児独特の無垢な顔に反して、表情は思慮深さが伺えて、なんともアンバランスだ。特徴からして、フェアリー族と思われる人物に、さっきから俺の視界に入っている、分かりやすい解答を教えてやる。

「ちよつと後ろ振り返ってマスト見てみな」

「はい？ ……はい？」

フェアリー族の人は、それを見た瞬間、啞然とした顔で固まった。塔のようにそびえ立っていたマストは、半ばから先が消滅してい

た。プレイヤーの大半を消滅させた、大蛇の謎の攻撃によるものだろう。消えている部分は、展望台から見上げるような高さにあることから見ても、攻撃範囲に高さや位置が関係していないのは間違いない。あんなに大きかった帆もズタズタに切り裂かれ、切れ端が残っているという有様だ。

「おそらく、攻撃を受けた時の姿勢が関係しているのではないかい？ 高さだけが問題なら、何故、背の低いフェアリー族が、彼以外に生き残っていない？ 背の高さはバラバラなのに、死んだプレイヤーは皆、どうしても頭部のみを失っていた？」

「あー」

「なるほど、立っているのがマズかったわけですね」

エルフの言葉に、他のメンバーが理解の色を示す。

未だ立ち上がれない俺と、体を起こそうともしないエルフ。他の元気な三人は、俺たちの周囲に集まって車座になるように座っている。

それにしても、本当に、妬ましくくらいに、他の三人は元気そう。俺とエルフは、すぐに動けないというのに、あの脳みそシェイクは、種族によって耐性でもあるのだろうか。

「あの海魔の謎攻撃を、頭がパンプレスと名付けましょう」

「おいばかやめろ」

元気だなあ、こいつら。

態度に余裕を見せる面々だったが、誰も彼も意識は暴れ回っている大蛇と銅像へと向けていた。

だって、銅像押されてるんだもの。

戦場がじりじりこっち近づいてきているんだもの。

はじめて乗っているガレオン船の威容を見たとき、船旅をするのにこれほど海難事故の心配をせずにする船はないだろう、と安心しまくっていたのになあ。

うん、襲われたら沈むね。確実に。

それに加えて、大蛇の咆吼もある。兆候を見逃せば、次こそ死ぬ。

それに、遠距離からの攻撃方法が、一種類だけとは限らないのだ。警戒せずにはいられませんとも。

所詮ゲームの死とはいえ、痛みはあるし、生々しい魔獣の咆吼など、迫力だけで怖気が走るほどだ。

どこにいても、船が沈めばお終いだ。しかし、せめて船室にいれば、いくらか恐怖も薄れるだろう。

「お前らは、逃げないのか？」

なのに、誰も展望台から降りようとしめない。

「なんか負けた気がするからイヤ」

「せっかくだし、神様と蛇のどちらが勝つかを見届けたいです」

「別に。なんとなくいるだけだ」

「……頭が痛い。動く気になれん」

四者四様の答えが返ってきた。みんな物好きだなあ。……エルフの人は例外だけだ。

「あんたは？」

「せっかくのイベントなんだから、最後まで参加したい」

戦闘なんて出来ないだろうけど、いるだけなら。

現実なら、絶対にこんな事を言わない。俺は、危険からは遠ざかる性質である。

石橋は叩いて叩いて叩いて渡る。藪があっても絶対につつかない。転ばぬ先の杖を常備しているような人間だ。

だから、ゲームの中では、普段では出来ないことをしたくなる。

理屈や効率よりも、その場の感情を優先して行動していきたい。これも一種の変身願望だろうか。

特に今、俺の目の前にはその典型であるメモリがいるのだ。つい、その行動を目で追ってしまふ。可能であればついていきたくなる。

この場に残った五人は、それぞれの顔を見回して、自然と口元をほころばせた。

即死範囲攻撃を回避して生き残った者同士、なんとなく連帯感のようなものを芽生えかけさせていると、誰もいなくなっていたはず

の甲板がにわか騒がしくなってきた。

「急げ急げ！ 気合い入れて押せ！ さっさと搬出をすませろ！」

「抜剣隊整列！ 剣士組は砲の搬出を手伝え！ 弓士組は五人一組で配置につけ！ 配置場所は弓限定パターン3！ 魔法士隊は全員魔導砲の給弾要因として、船砲隊の指示に従え！」

階下で人の気配が増え、鋭い声が飛び交いだす。

俺たちは顔を見合わせた。

「なんだ？」

「プレイヤー？ いや、船員かな」

様子を見ようとメモリはさっそく腰を浮かしていたが、階段を駆け上がるドカドカと乱暴な足音が続き、すぐに皮鎧を身に纏った十人ほどの姿を確認した。

向こうも、俺たちを発見する。

「はっ

先頭に立っていた人物は、息を切るように一瞬言葉に詰まった後、

「発見！ 生存者発見！」

甲板で作業していた船員達が、驚愕にどよめいた。

「なにっ！？ 生き残りだとお！」

「すげえ！ 海王の“首狩りの咆吼”をしのいだ奴がいたってのか！

船員たちまで騒ぎ出しているのを聞いて、俺たちは顔を見合わせた。

「ひよつとして、即死イベントだったとか？」

「いやあ、即死イベントにしては温いと思いますよ。現に警戒していた僕は、彼に言われるまでもなく自発的に伏せてましたしね」

「なんて自慢げな！ くっそー、くやしい！ あたしだって油断してなきや……！」

「んなことで張り合うなよ、うつつうしい」

「……これはあれか。頭の痛む私の周りで騒いでじっくりと痛めつけるという、婉曲な嫌がらせか」

俺たちはマイペースに盛り上がっていた。緊張感が続かないのは、やはりこれが命の危険がないゲームだからだろう。

のんびりしている俺たちに、船員は慌てた口調で警告してくる。

「とにかく、お客さんはさっさと避難してください！　いくら生き返られるからって、無闇に死にたくはないでしょう！」

なんて直裁な物言いをなさる。

死んでも生き返るのは本当だけど、NPCが普通にそういうこと言うのか。これはシステム面からの発言なのか、それとも復活のメカニズムがきちんと世界の設定にあるのか。気になったので訊ねようとしたのだが、

「ちよつと待つてよ！　あたしは逃げる気なんてないわよ！　ここで戦うわ！」

メモリが食ってかかっていつてしまつて、質問のタイミングを逸してしまつた。

と、いうか。

「ここに残るのは賛成。戦うというのなら、止めはしない。が、どうやって戦う？」

神の宿った銅像と、海の王とされる魔獣の戦闘は未だに続いている。ぶつかり合う度に海面が波立ち、蛇がビームのような鉄砲水を吐き出して、それを銅像が槍を振るって真つ二つに割つてみせたり。

……特撮？

「見るからに無理くさいんですけど」

あれは見る物であつて、混ざる物じゃない。

「我々では逆立ちしたつて海王を倒せませんよ。ネリオス様が少しでも戦いやすいよう、援護をするのです」

俺たちが避難するのを待つていた海兵が、神妙な顔で教えてくれた。

それにしても、海王とは。まさしくボスモンスター向きな名前だな。

「しかし、援護つて……。ダメージ通るのか？」

「通りませんが、船に積んでいる弓では無理ですね。では砲弾を、と
いったところで、海王は回避と防御の能力が高く、百発打って一発
当たるかどうか、といったところですよ」

「ダメじゃん」

「ダメではありません。ダメージにならずとも、気を引くことはで
きます。注意をこちらに向けて、その隙をネリオス様に突いてもら
うのです」

こっちに気を引くって……。

大蛇から逃れるために、大蛇に狙われなきゃならないと？

イベントだとかお約束だとかガン無視で、大蛇に船を沈められそ
うだ。

「そんなことが本当にできるのか？」

「できなければ、我々はみんな魚の餌になるだけです」

うーわー、そんな情報は知りたくなかった。それは明らかにフラ
グだろ。

船の無事はプレイヤーの頑張り次第と言っているようなもんだぞ。
ちょっと、やる気を出さないといけない気がしてきた。

「よし、ぜったいに斬ってやるわ！」

こっちはこっちで、最初からやる気満点だし。

まあ、その脳天気さが、今は頼もしいんだけどね。

それにしても、彼女の脳筋思考は何なんだらう。

「なんでメモリはそんなに近接戦闘をしたがるんだ。というか、あ
んな空飛んでる蛇に、どうやって斬りかかるうっていうんだ？」

「せめて一太刀！」

わけがわからない。とにかく意欲だけは伝わってくる返答に、俺
は彼女の考えを知る努力を放棄した。

「じゃあ、一太刀はいいよ。で、太刀はどこにある」

初期装備は身に纏っている衣服のみ。所持品に武器なんぞ、ない。
「人手不足なので、防衛を手伝ってくださいるのでしたら武器は貸し
出しますよ。そちらのお嬢さんは、剣でよろしいですか？ 海に棲

息する魔獣は多数存在しますし、海賊だっていますので、剣や鈍器も備えがあります」

さらりと言う船員。

「マジすか」

「よっし！」

うわあ、なんか満面の笑みでガッツポーズしてるよこの娘さん。

「それでは、協力してくださる方には武器をお貸ししますから、ついてきてください」

「はい！」

海兵と、メモリが歩いていくのを見て、残りのメンバーも腰を上げていく。

「……じゃ、俺、弓借りてくるか。弓使い志望だし。ここで練習しときてえ」

「あんな大ボス相手に練習というのも贅沢な話ですね。あ、僕は大概撃つてみたいので、砲兵としてお手伝いします」

「魔導砲というのが、一番体を動かさずに済みそうだな……」

三人とも、すぐに自分の戦う手段を決めていく。もはやイベント終了まで寝たきりかと思えたエルフの人までが、ゆらりと体を起こしていた。まだ頭が痛むのか、顔をしかめているけど。

俺の方は、すでに頭の痛みは消えている。

立ち上がり、ため息をつき、大蛇を睨み付けて戦意を振り絞る。

「それじゃ、神のご加護とやらに期待して、やるとしますか」

気合いを入れ、俺は戦う覚悟を決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899q/>

現実逃避して何が悪い！

2011年2月26日19時25分発行